

第二章 明理川の起源及其時代

古昔舊桑村郡は巽川の郷籠田の郷、吉岡の郷、津宮の郷、御井の郷、と稱し此五ヶ村の外なかりしなり。而して巽川とは入川 籠田とは古田 吉岡とは上市 津宮とは宮之内御井とは楠を云ふ。其後多くの年所を経て人口繁殖し廿餘の町村(今の部落)となる。

現在の大明神川が開通せざる時河之内山の溪谷より滔々流下する水は、象か森の山麓を廻り佐々久山の西に流れ。一定の堤防なく水勢は低きを逐ふて漫流し其所此所に水勢土砂を卷て寄洲は小山状を爲し。川なし川又は小島川と稱するに至れり。

一方相の山南東より北に流る、兩川か合流する所となる。此所を出合と云ふ此の滂湃たる兩川合流の鋭き水勢なるに現在の新川下流たる水道附替さる時流下する全部巽川の呑む所たり加之ならず満潮時に際して逆潮と衝突し特に大明神川開通なき其水の全部が巽川の郷に氾濫暴溢し。時に治水の防備なき蒙昧の時代民人の被害と驚怖を察知すべきなり。巽川郷は戎の木附近を中心に居住せしも水難毎に被害は巽川郷に限る時人巽川と云ふ村名を懼恐れて入川と改稱しにふ川と唱へしも尙折々洪水高潮川に溢れ人家を崩流する事頻々たり。茲に於て人々思ひくゝに其所彼所と住居を移轉するに至る潮水の難を免かれたる土地を圓海地と云ふ全く寺ありて村名とせしにあらざ村ありて寺の名後に定る又往古より此所に波周敷大明神と稱する恭しくも神明まします。其明い神の前に流る、川の上みに居宅を構へ一ツの里となりしにより社号の文字を象りて明理川と稱し明理川より北に方りて土地の高き所に逃行きて住居を占めた之を北代と云ふ。

尙川尻に水難多ければ入川と書く文字を又忌み嫌ひて丹の字は赤しと讀む故に火にして水難をかわかすふせぐ事を生ずると云ふ意味を以て丹生川と書て同にふ川と唱へしなり其後に至りて天照皇大神の御妹岡象女命を丹生の川上の神社と崇め奉るなり其御社號に村名の文字を附するは支障ありとし。伊勢の長官より御奉圖あり文和元年(大正十五年まで五百七十五年)

壬の年なれば丹の字を除き壬と云ふ字に替へて壬生川と改稱して現代に至る。而して壬生川の起源を溯舊するも不明なれども源平時代河野通信の臣出雲坊宗賢と云ふ勇士の子孫の住したる古跡にして。宗賢の子孫桑原遠江守弘兼は河野通堯に従ひ九州に行き西征將軍の宮に謁し歸りて伊豫を回收し。其後桑原刑部少輔同右京亮等之に居住し。桑原宗賢は黒川氏と戦ひし人なり。又桑原三郎左衛門同遠江守等あり桑原を改めて壬生川氏を稱す。壬生川攝津守は最後の城主なり。壬生川の記事は町史編纂の機に譲り之を擱き。單に源平の勝敗定り安徳帝入水元暦二年より大正十五年まで七百四十二年を經過したり而して壬生川の起源は其幾百年前の古き事は推想するに難からず